

2009年度（第11回）学生懸賞論文「女性学インスティテュート賞」

総 評

渡 部 充

本年度「女性学インスティテュート賞」に応募された論文は一本でした。選考委員の先生方の採点と委員会での議論の結果、最優秀賞には残念ながら該当しないと判断されましたが、優秀賞にふさわしいものではあると比較的高く評価されました。総合文化学科の卒業生、石井優香さん（I05349）の『「バックラッシュ」派による『ジェンダー』批判』という論文です。

まず、選考委員の先生方の講評と選考委員会での議論を踏まえたうえで、石井さんの論文の紹介と講評を簡単にします。石井論文は、千葉県市川市の条例改正にみられる問題点、男女共同参画社会基本計画における「ジェンダー」の定義の問題点など、関連する法令、要望書やウェブ・サイトの文書などを示しつつ、「バックラッシュ」派（ここでは石井さんの表記を使います）の問題点を論じたものです。具体的な事例を紹介しつつ論を展開するという手法は、実証的な手堅いもので、大変分かりやすいものでした。全体を通して、「ジェンダー」概念にまつわる議論、「ジェンダー・フリー」やそれに基づく「過激な」性教育に対する「バックラッシュ」派の批判が取り上げられており、「女性学インスティテュート」賞にふさわしいテーマを真正面から扱うものでした。こうした議論になじみのない学生が読めば、「ジェンダー」「ジェンダー・フリー」「バックラッシュ」などの基本的な概念と議論が一通り理解できるだろう啓蒙的なものになっています。学部学生が卒業論文として執筆したものとしては、よく書かれていたと思います。

いっぽう、いくつかの問題点も指摘できます。自身の議論がやや表面的で、先行研究や議論の紹介にとどまっているような印象を受けました。特に対象としている「バックラッシュ」派についての考察が不十分でした。その歴史的な経緯や政治的文脈などをしっかりおさえて、彼らが「何を批判しているのか」

あるいは「何を恐れているのか」、その理由は何なのか、などを鮮明にするような論を展開した上で、自らの考えを提示すれば、いっそう深みのあるものになったと思われます。ともすれば、資料からの引用が羅列されるにとどまり、論者の分析や論考がおろそかになっていたようです。結論ではわれわれの「意識を変える」必要性が説かれていましたが、何についての意識をいかに変えるのか、なぜその必要性があるのかなどについてはあまり明確ではなかったと思います。他にも文章の曖昧性や、繰り返しの多いことなども指摘できるでしょう。しかしながら、こうしたある意味「ど真ん中」なテーマをしっかりと扱い、かなりの分量の資料を読み込んだことが見て取れる論文で、その意気込みは大いに評価されるべきものと思います。

今回応募してくださったのはわずか一本でしたが、一定の評価は与えられる力作であったのは幸いでした。昨年のこの「総評」でも書きましたが、応募論文数が一昨年は四本、昨年は三本、そしてついに本年度は一本と減少傾向が続いています。一年前に、本賞応募論文が質、量ともに充実することを望むという趣旨のことを書きましたが、大変残念ながら、質の議論はおくとして、量的にさびしい限りのものでした。「女性学」という科目を担当すると、学生のみなさんの「女性学」や「ジェンダー」への関心はけっして低くはないことを実感します。そうした関心を論文執筆へとつなげる学生への動機づけや、本賞に応募するように学生を鼓舞する努力がわれわれに欠けていたように思います。

(女性学インスティテュート学生懸賞論文選考委員長)